

大学と保護者の関係は、今

志望校選びの段階から、入学後の履修状況や成績の把握、就職活動に至るまで、保護者の関与の度合いが強くなっている。これを受け、大学は、保護者とのコミュニケーションのとり方を見直しつつある。高校生、大学生それぞれの保護者に対して、各大学・団体などが行っているアプローチや施策から、大学と保護者の動向を見る。

高校生の保護者

きめ細かい情報提供や父親との関係づくり

「父親の会」で学校との対話の機会

——桜美林中学校・高校

PTA活動に数居の高さを感じがちな父親と意思の疎通が図れるよう、「父親の会」を開催。年々参加数が増え、この会への出席を機に従来の保護者会へも参加するようになるとのことだ。「中学・高校生は、自我を形成する時期。母親と一緒に父親のアドバイスも必要」と本田栄一校長。最近、進路相談会などでも父親の姿が多くなった。「父親の豊富な社会経験と広い視野からのアドバイスは、生徒にとっても役に立つ」（本田校長）。

キャンパスツアーで学生支援の施設を案内

——神奈川工科大学

受験生の保護者限定の説明会とキャンパスツアーを行っている。ツアーでは、キャリア就職課などの学習・就職支援施設を案内。「学生の育成は保護者との二人三脚。施設やスタッフを見て支援体制の厚さを肌で感じ、入学後、学生がつまずいたら利用を勧めてほしい」と黒古敦企画入学担当部長。

エリア別のパンフで地元での就職状況を紹介

——法政大学

保護者向けパンフレットを、「北海道・東北版」「関東甲信越版」「東海・北陸・西日本版」と、3地域で作分けしている。地元での就職状況を具体的に知りたいという声に応じて、各地域における就職先の企業名と卒業生の就職体験談を掲載。就職先企業が全国に広がることを示し、保護者の支持をねらう。

保護者対象の説明会で大学の強みを具体的に紹介

——南山大学

毎年3月、保護者のみを対象とするオープンキャンパスを開催している。保護者が心配する就職支援や就職実績などを説明。また、「国際的な大学」というイメージを裏付けるため、大学案内やウェブサイトでは伝えきれない特長的な

学習の方法や内容、支援などを具体的に紹介。同大学は受験生の保護者を重要なステークホルダーと位置付け、その関心に応えることを重視している。



大学生の保護者

学生生活や就職に関する情報共有のしくみづくり

学食の利用状況を家庭に伝えるサービス

——大学生協東海事業連合

2012年5月、学食で食べたメニューや回数などを家庭でもネット経由で確認できるサービスを開

大学・学生の情報を共有し親子の会話を促進

——大阪商業大学

学生・保護者・大学の3者のコミュニケーション冊子「Pi.TA.ri.」を、2009年から年2回発行。毎号、保護者にアンケートをとり、学生生活・就職サポートなど、知

りたい情報を紹介している。わが子との対話に活用してもらおうのがねらいだ。



出席状況や成績の情報をネット上で開示

——東海大学

ネットで時間割、出席状況、成績の確認や、求人情報の検索など

ができる学生向けサービス「キャンパスライフエンジン」を、2011年度から保護者にも開放した。初年度は学生数2万9000人の約2割に当たる6300人の保護者が利用。成績が発表される月のアクセス数が多いという。

父親と母親の双方の視点から大学受験を支援

大学による保護者対象の広報は定着し、独自の工夫を凝らす例が増えてきている。

今の高校生は、保護者と行動を共にすることに抵抗がないといわれる。進研アドが2012年6月に名古屋で開催した進学相談会でも保護者の姿が目立った。来場した高校生が2443人だったのに対して、保護者は661人。高校教員による引率を除くと、半数以上の生徒が保護者と一緒に参加していたことになる。

かつてのこの年代とは異なり、父親ともコミュニケーションが比較的活発で、オープンキャンパスに両親そろって参加する家庭も珍しくない。高校生にとって、両親は「過干渉で煩わしい存在」ではなく、「大事なことを相談する相手」になっているようだ。

ある高校教員によると、多くの生徒は進学に明確な目的意識がないため、自分で志望校を決められないらしい。このような状況も、保護者が志望校選びに関与する背景にあるのではないかと。保護者に自学を理解してもらわなければ、志望校の候補にすらなれないという認識が大学の間に広がり、それ

始した。ICカードによる支払いシステムを利用しており、12月現在、名古屋工業大学と愛知大学の生協が導入。「わが子の食生活と健康を気づかう保護者のニーズに応えたい」（稲吉顕吾名古屋工業大学生協専務理事）。導入を検討している大学生協は多いと、同氏は話す。

全都道府県に保護者会支部を設置

——東京理科大学

毎年、全国4都市ほどで父母懇談会を開いていたが、県ごとの父母会設立と父母懇談会の開催を望む声上がり、2004年に父母会本部を設立。現在では46都道府県（鳥取・島根は合同）に支部が設置され、毎年、支部ごとに父母懇談会を開催している。会員は正会員（学部学生の父母）、特別会員（教職員）、賛助会員（卒業生の父母）から成る。父母が交流を図る支部会での意見は、役員会で共有し、必要に応じ大学に提出される。

がさまざまな形でのアプローチにつながっていると言えそうだ。

複数の受験生の保護者から、高校が、保護者会に父親の参加も呼びかけるようになったと聞いた。実際、平日に仕事を休んで参加する父親もいるそうだ。

子育てや教育への参加に積極的な父親が増えたことをふまえ、大学や受験に関する理解を深めて、高校、母親と一緒に進路選択を支援してもらおうということだろう。職業人としての知識と経験を生かした父親の助言は、高校生にとって説得力があり、心強いはずだ。

**採用担当者の話を
保護者が聞ける説明会**

——金沢星稜大学

複数の企業を大学に招いて行う合同就職説明会に、保護者も参加できるようにした。「就職活動の実態を知り、大学と学生、保護者の

三位一体で就職活動に取り組んでもらうため」(堀口英則進路支援センター長)。2012年は、3年生約180人に加え、1～3年生の保護者約140人が参加。3年生と共に各企業の担当者の話を聞いた。就職コンサルタントによる、子どもの就職活動の支援についてのセミナーも行われた。

**保護者が大学を評価し
改善を促すしくみ**

——帝塚山大学

保護者を外部評価委員に起用し、キャリア支援などについて、改善すべき点の指摘を受ける。「保護者はわが子を思い、大学に何を求めるかを考え、それが実現しているかシビアに評価する」と多賀久彦事務局長補佐は起用の理由を話す。

子どもとの関わりに対する意識調査

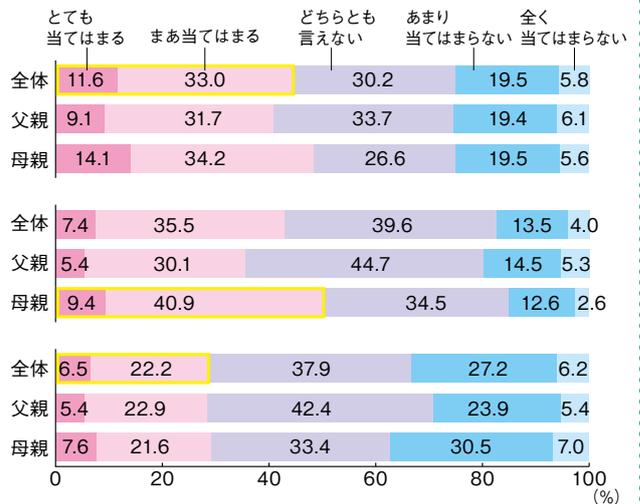
——ベネッセ教育研究開発センター

2012年3月にベネッセ教育研究開発センターが実施した「大学生の保護者に関する調査」では、子どもとの関係について聞いている。右はわが子の将来・進路選択について聞いた結果だ。約45%が将来について不安を感じると回答。母親の半数が自分の意見を子どもに伝えている。こうした「口出し」を嫌がられていると感じる保護者は、30%以下にとどまる。

子どもの将来のことを考えると不安になる

子どもの大学生生活や進路選択について、自分の意見ははっきりと伝えている

子どもは、親が大学や進路のことを調べたり口出ししたりするのを嫌がっている



**保護者との協力による
就職支援へとシフト**

近年は、子どもが大学生になってからも、保護者の積極的な関与は続く。成績や就職サポート体制について知りたいという要望は強く、各大学はさまざまな形で対応している。例えば、明治大学は全学生の成績表を保護者に届けている。神奈川工科大学のように、出席状況をメールで知らせる大学もある。学生の状況を正しく把握してもらい、学びや就職活動に協力を仰ぎたいという意図からだろう。特に近年の厳しい経済状況下では、就職活動を成功

に導くために家庭のサポートが不可欠と考える大学は多い。理不尽なクレームを防止するためにも、大学ができることとできないことをきちんと伝えるべきだろう。

大学の就職指導を手厳しく批判する保護者もいるようだ。ある大学は、保護者向けの就職相談会で父親から「この程度の支援では、企業の人事担当者には何も響かない」と指摘を受けたという。こうした発言を企業人のアドバイスとして受け止め、改善につなげる姿勢も必要ではないか。

多数の自治体が、大学生の保護者向けに就職支援セミナーを実施するよう

になり、地元企業の魅力を伝えていく。学生が就職活動をするうえで保護者がキーパーソンになることを自治体も感じてのことだろう。入社式に保護者を招待する企業も登場。会社と従業員の間、まさに「ファミリー」としての一体感をつくろうというねらいがうかがえる。

子どもへの関心や学校への期待が強過ぎて、モンスターペアレント化する例は大学でもあるようだ。ある大学では、法学部の教員が法律の知識に基づいてクレームに対応しているという。理解し合い、協力し合う関係づくりを基本にした対話が重要だろう。